

藤内哲也著

『近世ヴェネツィアの権力と社会』

——「平穩なる共和国」の虚像と実像——

北 田 葉 子

本書は、近世ヴェネツィアの権力構造についてわが国で出版されたはじめての本格的な研究書である。近世ヴェネツィアについてはこれまでも永井三明氏の『ヴェネツィア貴族の世界』（刀水書房、一九九四年）や『ヴェネツィアの歴史』（刀水書房、二〇〇四年）などの研究が存在したが、本書は、堅固な貴族による寡頭制支配が行われてきたといわれてきたヴェネツィア社会の内側の動きに注目し、その権力構造を解き明かそうとした点で注目に値する。

本書は博士論文に加筆・訂正を加えたものであり、六本の既発表論文がベースになっている。以下、本書の内容を紹介しながら論評を加えていくことにするが、既に斎藤寛海氏が本書の書評を行っている¹ので、重複すると思われる点はここではなるべく述べることにする。まず、本書の全体の構成は以下のようになっている。

序 近世初頭のヴェネツィア 政治・経済・社会

I 投票に基づく「柔らかな寡頭政」

——一五一六―一二六六年におけるサヴィオ・グランデの選出をめぐる――

II 一五八二―一八三年の十人委員会改革

III 書記局官僚層の形成

IV 「鉄を金に変える卑しき鍛冶屋のごとく」 貴族階級における新家系の成立

序章では、一六、一七世紀のヴェネツィア史が概観され、本書の目的が述べられる。ここで重要になるのが、ヴェネツィアの貴族寡頭体制を理想化する「ヴェネツィア神話」の存在である。この神話によって、ヴェネツィアは内部抗争などほとんどない「平穩な共和国」であるとされ、その傾向は現在の研究史にも受け継がれているという。すなわち、ヴェネツィアの貴族層はすでに固定化された身分として描かれる一方、市民階級の社会的上昇については考慮されてこなかった。著者は、このような研究史を踏まえた上で、貴族階級内部の変化と貴族階級が新興勢力を権力構造に取り込むプロセスを解明し、「平穩なる共和国」といわれ続けてきた近世ヴェネツィアの権力構造の変化を明らかにすることを本書の目的であるとしている。

これまでの静態的なヴェネツィア像に挑戦しようとする著者の切り口は鋭く、この姿勢は本書の全編に共通している。ただ、同じイタリアの近世ではあるが、ヴェネツィアよりも明らかに動的な動きを見せたフィレンツェを研究する筆者にとつては、疑問も残る。というのは、イタリアの他都市との比較で言えば、やはりヴェネツィアは静態的であり、「平穩」なのである。結論的部分

の先取りになるが、貴族層内部の変化も非貴族層の社会的上昇も、劇的な変化をもたらさずに終わってしまう。本書は確かにヴェネツィア内部のさまざまな動きを抉り出すことに成功している。しかし本書が明らかにしているように、その動きは吸収されてしまふ。したがって、結果としてはむしろヴェネツィアの「平穩」さが浮かび上がってくるような気がする。この点で、著者の意気込みに共感できない点が残った。序についてはもう一点気になるところがある。それは、著者がヴェネツィアの近世をいつからと考えているかという点である。「一五世紀後半からの近世ヴェネツィア」と言う言葉が序の最後に書かれているが、なぜ一五世紀後半からなのかは説明されていない。一五世紀後半からを近世とするのは、他のヨーロッパ諸国やイタリア諸国と比較するとかなり早いのではないだろうか。筆者が近世史を専攻しているせいかもしれないが、ヴェネツィアのような中世から近世まで政体が変わらない国家の場合、いつからを近世と見るかは興味深い点であり、この点に言及してほしかった。

第一章では、ヴェネツィア共和国の政治機構と官職の選出システムを概観した後、「サヴィオ・グランデ」、「四十人委員会」、「十人委員会」といった要職の就任者と候補者が分析され、一定の有力貴族層が高位官職をほぼ独占している状況が明らかにされている。ただし、高位官職はあくまで投票によって選出されるものであり、その点で寡頭政を形成する有力貴族は、貴族全体の中で承認され正当化されるという点に、著者は着目する。この制度によって、貧困貴族層は有力貴族層の選出を否決するという消極的な抵抗しかできなくなり、結果的にヴェネツィアの寡頭政を維

持することになった。このような投票に基づく寡頭政を著者は「柔らかな寡頭政」と呼んでいる。

この章では、分かりにくいヴェネツィア政府の機構が図解されるなど、ヴェネツィア史に詳しくない者にも配慮があり、論旨も明快である。また要職の就任者のみならず、候補者にまで目を向け、落選し続ける候補者を中間層として位置づけている点などには、ヴェネツィアの貴族社会全体を見ようとする広い視野がうかがわれる。「柔らかな寡頭政」という言葉は、ヴェネツィアの寡頭政の特色をよく示しており、次の第二章の展開にも有効なものとなっている。ひとつだけ気になるのは、官職の選出について扱っているにもかかわらず、史料がマリン・サヌートの『日記』のみだということである。サヌートの日記は五八巻にも及ぶ長大なものであり、ここから官職選出についてもかなりの情報が得られるのも確かであるが、この史料に限ったことにより、「サヴィオ・グランデ」以外の官職については、情報がかなり少なくなってしまったことも否めない。今後の日本における近世ヴェネツィア史研究の発展のためにも、せめて、官職の選出に関する史料状況に言及すべきだったのではないだろうか。

第二章では、一五八二年から一八三年にかけて行われた十人委員会改革、すなわちその権限の縮小と追加委員職の廃止が取り上げられる。著者によれば、この改革をめぐる、二つの学説があると言う。一つはこの改革を「老人派」と「青年派」の対立の頂点と捉え、「青年派」に権力が移行したとする「交代」説であり、もう一つは、指導者層の交代は起こらなかったとし、「老人派」と「青年派」の対立そのものを重視しない「連続」説で、これは

M・ローリーが主張したものである。著者は、ローリーの主張を「説得力に富む」としながらも、改革の原因については「交代説」と主張を同じくする点、そして長期的な視野が欠けている点で、ローリーをも批判する。そして高位官職就任者についてのプロンボグラフィカルな分析によって、十人委員会改革と「老人派」と「青年派」の対立は別のものであり、改革は寡頭政をめぐる伝統的な貴族階級内の対立によるものだったと結論するのである。

ローリーの主張にグレンドラーのプロンボグラフィカル研究を援用して、十人委員会改革によっても寡頭政の権力構造に変化はなかったとする著者の主張は、明快であり、主張を裏付けるための表も分かりやすい。第一章で定義された「柔らかな寡頭政」が十人委員会改革をめぐる混乱によっても揺るがず、それが有効に機能し続けたことがはつきりと示されている。ただ、この章についてはいくつかの問題があると思う。まず、「老人派 *vecchi*」、「青年派 *giovani*」とは何であり、どのような派閥なのか、明確になっていないということである。本章内に引用されているフランス大使の言葉では、「青年派」と同じ言葉の訳語が「若者たち *giovani*」となっている。両者の対立は世代の違うものたちの対立なのだろうか。この点について、著者はまったく触れていない。結果的には、「青年派」は反教皇的な外交政策を押すグループとされているが、となると、元老院改革が年長の貴族とより若年の貴族によって争われていたとする同時代の報告をどのように解釈すればいいのだろうか。また、両派の明確な定義がないため、政権交代は存在せず、寡頭政に変化は起こらず、投票に基づく

「柔らかな寡頭政」が有効に機能していたとする著者の主張も、インパクトが欠けてしまう。さらに、両派の対立が十人委員会改革とは関係していないということを証明することには紙幅を割いて入るが、十人委員会改革の本当の原因だったとされる寡頭政への反対派についてはほとんど分析していない。結果的に本章は、十人委員会改革ではなく、老人派と青年派の対立の本質を論じる章になってしまっているのではないか。

第三章では、貴族層ではなく、市民層に目が向けられる。著者は、近年注目され始めた書記局官僚層を本章の対象にし、これまでの研究が従来の静態的なヴェネツィア像の中でのみ行われてきたことを批判し、その枠組みをこわし、書記局官僚層の形成や発展の過程そのものを追及しようとする。著者はまず、貴族に次ぐ地位である市民身分とは何かを明確にし、その中でも「生まれによる市民」という上層市民層が書記局官僚を生み出す母体であったことを示している。そして書記局の組織と権限を概観した後、書記局官僚の社会的出自の分析から、書記局官僚家系とも言うべき家系が誕生し、彼らが職務のみならず婚姻関係によっても有力貴族層と結びつきながら、「高貴なる市民」として社会的上昇を果たしたことを明らかにする。そして一部有力貴族が彼らに支えられて寡頭政を行う一方で、多くの貴族が権力から排除されているヴェネツィアの権力構造を、「ねじれた」として位置づけている。

本章は、静態的なヴェネツィア像を打ち破ろうとする著者の試みの中でもっとも重要な章であろう。市民層でありながら、いわば有力貴族層に肩を並べる社会層にまで登りつめ、貴族的な生活

様式をし、祝祭などの場面では一般の貴族をしのご位置づけを与えられるまでにいたった書記局官僚層の社会的上昇は、確かに静態的なヴェネツィア像のイメージを壊すものと言える。ただし、著者も認めているように、彼らの社会的上昇は、有力貴族層に依存したものであり、貴族と同等になることはなかった。静態的なヴェネツィア像が打ち破られたと見るかどうかは、読み手によって分かれるだろう。また、本章で残念だったのは、ヴェネツィアの官僚制がテーマであるにもかかわらず、書記局のみに焦点が絞られ、官僚層の全体像が見えなかったことである。官僚の中でも書記局官僚層が社会的上昇という点では突出していたようであるが、書記局以外の官僚層はどのような状態にあったのかについては、ほとんど言及がない。書記局官僚層をヴェネツィア社会の中に位置づけるためにも、官僚層の全体像を示すべきだったと思われる。

第四章では、ヴェネツィアにおける新貴族の誕生が取り上げられる。一三八一年以来、貴族階級を閉ざしてきたヴェネツィアであるが、一七世紀半ばから断続的に新たに貴族家系に連なる者たちが誕生する。著者は、新貴族がどのように旧来の貴族体系へ統合されていくかを重視していたこれまでの研究を批判し、新貴族の成立を「社会的上昇」の観点から見ようとする。そのためにカンディア戦争という危機の中で経済援助の見返りに貴族身分を手に入れた家系の社会的出自を分析し、短期間で蓄財して社会的上昇を果たした、すなわち「鉄を金に変える卑しき鍛冶屋のごとく」貴族身分を獲得した都市外出身の家系が差別されていた状況を明らかにする。新貴族家系は結果的には新しい政治勢力となる

ことはなく、個々の家が貴族階級の中で更なる上昇を目指していくうちに、従来の貴族層の中に統合されていくことになる。以上の点を踏まえて著者は、書記局官僚層や支配下の各地域の貴族層をエリート層に取り込むことのできなかったヴェネツィアの「限界」を指摘し、「柔らかな寡頭政」の下にあったヴェネツィアでは、官僚層や新貴族家系を、既存の権力構造を支える力に転化していったとする。このような社会的上昇のプロセスと権力構造上の変容の過程における「ずれ」こそが、「平穩なる共和国」としてのヴェネツィアを演出する要因であり、近世ヴェネツィアの特徴であると著者は主張している。

これまでと異なり一七世紀を扱った章であるが、社会的上昇の問題を扱う以上、新貴族の問題は避けて通れないだろう。その点で、新貴族の出自を明らかにし、彼らが従来の貴族層に取り込まれていくことを明確にしたこの章は、本書を締めくくるにふさわしいといえる。社会的上昇を果たした書記局官僚層ばかりではなく、新貴族をも貴族勢力を支える力に変えていくヴェネツィアの「柔らかな寡頭政」の「強さ」が、一七世紀にまで及んでいたことが、本章では明確にされている。

ただこの第四章で気になることは、「貴族」という言葉が、中世からの一貫したものとして使われていることである。本書の対象となっている一七世紀は、イタリアの貴族がいわゆる都市貴族的な「貴族」から、血の純潔や家系の古さを重視する封建的な「貴族」へと変わっていく時代である。共和国のヴェネツィアでもこの現象は生じており、実際本書の記述の中にもそれが感じられる箇所がある。したがって、新貴族家系に対する「差別」の問題

を扱う際には、まず背景としてこのような貴族観の変遷に言及すべきだったのではないだろうか。

最後に本書全体に関わることについて、評を加えていきたい。

まず構造の点からであるが、本書には「結論」にあたる章が存在しない。第四章の最後がそれにあたると思われるが、やはり一冊の本で明確な問題提起をした以上、それに答える「結論」にあたる章を設けるべきであろう。

また第一章について述べるときにも触れたが、史料の問題がある。全体として一次史料の使用が少なく、これまでの研究に依拠する部分がかなり大きい。第一章については前述のとおりであるが、第二章はグレンドラーの論文、第三章はネフの著作のデータに依存している。第二章と第三章という本書の中核をなす章において、主に使われているデータが他者の研究に依存している点で、物足りなさを感じた。第四章では二冊の著作がおもな史料となっている。パティスタ・ナーニ『ヴェネツィア共和国史』と匿名の著者による『ヴェネツィア貴族の間にある隠された相違』である。後者はマニエスキリプトであり、一次史料という点では問題はない。

い。しかし新貴族の社会的出自についても、この「隠された相違」などの著作に依存している。同時代人の視点を探するという目的があるため、このような分析は必要であり、著者はそれを有効に利用している。しかし、貴族選出の際の史料などは存在しないのかどうか、疑問が残った。全体として、近世のヴェネツィアを知るために、どのような史料がどれだけ残っているのかという点が見えてこなかったのが残念である。

いろいろ注文はつけてきたが、本書はこれまでの近世ヴェネツィアのイメージを塗りかえ、静態的と言われてきた権力構造の内部を抉り出そうとした意欲的な著作である。また、切り口の鋭さや効果的な表の利用など、随所に著者の鋭いまなざしを感じられる。今後の著者の更なる研究に期待したい。

1 斎藤寛海「藤内哲也著『近世ヴェネツィアの権力と社会』」『社会経済史学』七二(二)号、二〇〇五年、一〇二—一〇三頁。